

あり。十一月二十七日より三日の間獵場山鹿倉山の祭あり。南三社祭神天太玉命・天乃比理乃咩命・天日鷲命に奉幣し、五穀成就郷内安全の祈禱をなし、及び神樂・祝詞等の式を行ふ。十二月朔日繩張の神事を行ふ。廿七日氏子相會し注連百五十尋を綯ひ、本殿より鳥居まで引張り、清酒を供し祈禱を唱へ神樂を奏す。之を下神獵一の日と云ひ、廿七日を上神獵一の日と云ふ。

七尾 明神

那古町正木の山中に御狩ヶ谷と稱する處あり。此に民家三軒あり。年々正月元日未明に三軒の主人相共に神殿に往いて鏡餅を供へ、暫し拜伏すれば、其の供物何れへか失せて影なし。是を山神の受納ありとて大に喜び、若し受納なきときは四肢を寒水に涵し、再び社殿に至りて平伏す。然るときは必ず山神の受納ありといふ。然して家に歸らんとする途上、面識の者に會ふも一語を交ゆること能はず家に歸り席に復するの後、家人茶を煮て主人の前に進み、背後を向け跪いて之を侑む、苟も神前供へ物濟まざる内は邑中年賀の禮を行ふことを得ずと。傳へ云ふ。當村羽山氏の拜禮の時は白鳥出でて禮物を納むと。

加世越之助

白濱村に加世(加瀬に改む)越之助と言へる舊家あり。往時里見義實初めて此の地に著船の時、加瀬氏の祖先某漁獵を了へ適と此處に居合せたるが、義實が乗る處の舟岩礁の爲に碍げられて岸に達するを得ず、陸に上らんとして水深き故涉ること能はず。此の人の肩に跨騎して上陸せられたり。義實其の勞を謝し、他日酬ゆる所あることを約す。時に某答へけるやう、我等生前に於て他に冀望なし、幸

に姓名を贈與せられよと。此の時右手にかせと言ふ漁具を持てり。義實問ふて曰く、其の携ふる所のものは何物ぞ。こはかせと申すものなりと答ふ。然らば汝我を負うて水を越し陸せしめれば、以後加世越之助と稱すべしと申されける。依つて代々加世越之助と言へりとぞ。白濱杖院寺寶中に當時義實の史筆これを記したる文書を藏す。蓋し信を措くに足るものなり。

源頼朝に關する傳説

治承四年石橋山の合戦に利あらずして、八月二十七日相州眞鶴岬より纜を解き、本郡龍島に上陸せらる。頼朝の上陸地點につきては異説あり。その夜民家に宿り、九月一日、勝山の住人安西三郎景益の館に入り、ひそかに近國の形勢を見て、權謀をめぐらし、諸國に割據する源氏のもとに徹して獨く兵を募り、再舉の準備をなす。かくて房總の武人悉く馳せ參し、翕然として四方より會する軍士殆ど十萬といふ。是より先頼朝は上總介平廣常の居所を訪れんとし、三浦義澄を先導として龍島を發し、池月大崩の山路を傳へ、峯岡を経て貝渚に入らんとせし頃、日ははや西山に没して暮色蒼然たり。其の夜是非なく其處の民家に投ず。時に長狭六郎常伴と云ふ者頼朝の貝渚に投宿せるを聞き、心ひそかに之を喜び、郎黨左中太常澄に命じて、貝渚の旅館を襲はんとせり。然るに三浦義澄豫め之を悟り、貝渚餘瀨に陣し却つて機先を制して常澄の軍を要撃して大に之を破れり。翌四日義澄の患を慮り、頼朝に歸館をうながし、和田義盛を上總介廣常のもとに、藤九郎盛長を千葉常胤の許に遣はし歸順を命じたり。先に貝渚に至る道すがら頼朝の盟激したる楊子水は峰岡山の頂上にありて、旱天と雖も潤る、ことなしと言ふ。又高崎には旗竿鉞といふ所あり。頼朝その鉞に於て竹竿を伐り旗竿に用ひたりと云